

プレスリリース

狂乱の時代を生きた旅人の軌跡。

jules

生誕130年 エコール・ド・パリの貴公子

パスキン展

2015.

1.17土 - 3.29日

Shiodome
Museum
ROUAULT GALLERY

パナソニック
汐留ミュージアム

ルオーギャラリー



少女-幼い踊り子 広報用貸出画像①

1924年 油彩、カンヴァス ハリ市立近代美術館蔵
©Eric Emo/Musée d'Art Moderne / Roger-Viollet

0歳～2歳児対象 赤ちゃんからの家族鑑賞プログラム 「パスキンといっしょ」

赤ちゃんとその家族のための美術館での鑑賞会です。講師と一緒に展覧会をめぐり、ゆったりと美術館や作品を楽しむ鑑賞ツアー。

*このプログラムの参加者には動画および写真等の記録撮影およびアンケート調査などのご協力をお願いします。

日時 | ① 2015年2月18日(水) 11時～と14時～の2回(1時間程度)

各回先着6組まで*休館日ですが本プログラムのみ実施します

② 2015年3月2日(月) 11時～と14時～の2回(1時間程度)

各回先着4組まで*通常開館時間中に本プログラムを実施します

講師 | 杉浦幸子氏 協力 | 武蔵野美術大学芸術文化学科

参加費 | 無料(ただし中学生以上の同伴者は本展の観覧券が必要です)

お申し込み方法 | ハローダイヤル 03-5777-8600へお電話にてお申し込みください。

受付開始日 | 2015年1月22日(木)より 受付時間 | 水曜日以外の10時から18時

【必要事項】①イベント名と参加希望の回(例:2/18 11時～) ②参加人数 ③氏名とお子様との続柄(参加希望者全員の氏名が必要です) ④参加されるお客様の年齢と月齢 ⑤電話番号 *受付は先着順、定員になり次第締め切らせていただきます。お申し込み時にいただいた個人情報は、本イベントの受講管理の目的でのみ使用致します。なお、お預かりした個人情報は、上述の目的での使用に同意いただいたものとさせていただきます。*プログラム参加時にご協力いただいた撮影動画や写真、アンケートなどは当館ならびに武蔵野美術大学での美術館における鑑賞プログラムの研究と開発に使用致します。お申し込みに際しては、上述の目的での使用に同意いただいたものとさせていただきます。

会話式のギャラリートーク「みる・はなすパスキン」

講師と共に作品をよく見て、感じたことを話しながら、美術館での鑑賞のポイントや展覧会を楽しむツボを学ぶ機会となる鑑賞ツアー。

日時 | ① 2015年1月25日(日) 11時～講師 杉浦幸子氏 14時～講師 当館学芸員

② 2015年2月21日(土) 11時～講師 当館学芸員 14時～講師 杉浦幸子氏

参加費 | 無料(ただし中学生以上の参加者は本展の観覧券が必要です)

お申し込み方法 | 各実施日当日ミュージアム受付にてお申し込みください。
(10時より受付開始。電話でのお申し込みは承っておりません)

対象年齢 | 小学生から一般まで 定員 | 各回先着6名

ジュニアガイド「みてねパスキン」

パスキン展の鑑賞をサポートするワークシート(小学生対象)を会期中、展覧会入り口にて配布します。

生誕130年 エコール・ド・パリの貴公子

パスキン展

2015年1月17日(土)～3月29日(日)

会場	パナソニック 汐留ミュージアム 〒105-8301 東京都港区東新橋1-5-1 パナソニック東京汐留ビル4階
開館時間	午前10時より午後6時まで(ご入館は午後5時30分まで)
休館日	毎週水曜日(但し2月11日は開館)
入館料	一般:1,000円/65歳以上:900円/大学生:700円/中・高校生:500円/小学生以下無料 ※20名以上の団体は100円割引 ※障がい者手帳をご提示の方、および付添者1名まで無料でご入館いただけます。
主催	パナソニック 汐留ミュージアム、東京新聞
後援	在日フランス大使館/アンスティチュ・フランセ日本、駐日ブルガリア共和国大使館、港区教育委員会
企画協力	ホワイトインターナショナル
お問い合わせ	03-5777-8600 [ハローダイヤル]
関連サイト	http://panasonic.co.jp/es/museum/



交通のご案内

JR「新橋」駅より徒歩約8分、東京メトロ銀座線・都営浅草線・ゆりかもめ「新橋」駅より徒歩約6分、都営大江戸線「汐留」駅より徒歩約5分

本件についてのお問い合わせ先

◎ 「パスキン」展 広報事務局(ウインドム内) 〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1-28-9 ヤマナシビル4F

TEL.03-6661-9445 FAX.03-3664-3833 (担当:妹尾・橋川) pana-m-pr@windam.co.jp

◎ パナソニック株式会社 パナソニック 汐留ミュージアム 報道担当 倉澤 TEL.03-6218-0078

◎ ご掲載時の一般お客さまお問い合わせ先:TEL.03-5777-8600[ハローダイヤル] <http://panasonic.co.jp/es/museum/>

※「広報用貸出画像」以外の作品画像をご希望の際はご相談ください。

Shiodome Museum
ROUAULT GALLERY

パナソニック
汐留ミュージアム

パナソニック 汐留ミュージアム
生誕130年 | エコール・ド・パリの貴公子

パスキン展

ポンピドゥー・センター、パリ市立近代美術館、
ヨーロッパ個人コレクション…
珠玉のセレクションによるパスキンの回顧展

パリにあるコミテ・パスキン*の全面的な協力のもと国内では16年ぶりとなるパスキンの本格的な回顧展を開催します。

ジュール・パスキン(1885-1930)は、「エコール・ド・パリ」といわれる主に1920年代にパリに集った異邦人芸術家たちを代表する画家です。フジヤキスリングを親友に持ち、ピカソやシャガールにも活躍した第一次大戦後の「狂乱の時代」に、パリで高い評価を受けて、次々と作品が売れた時代の寵児でした。なかでも、繊細で震えるような輪郭線と、真珠のような輝きを放つ淡く柔らかな色合いで描かれた女性や子どもたちの作品で人気を博しました。

本展では、まず20世紀初頭のミュンヘンで時代と風俗を鋭く写し取った風刺画を雑誌に寄稿しながら、デッサンの修練に余念がなかった時代の作品を紹介。また、その後パリに移住し、本格的に油彩画に取り組んだ時代の意欲作や書籍の挿絵風の水彩が並びます。さらに第一次大戦を回避し渡ったアメリカで生まれた、精鋭な仲間たちや旅した中米各地の風土から影響を受けた作品が出品されます。最終コーナーでは、パスキンの全盛期である1920年代後半の充実した真珠母色の油彩作品群に加えて版画やパステル、コラージュなど多彩な作品が揃います。

本展はいわば、狂乱の時代を生きた旅人の軌跡です。エコール・ド・パリの貴公子パスキンの名品の数々を是非ご覧ください。



二人の座る少女 広報用貸出画像②

1925年 油彩、厚紙(板に貼付) パリ市立近代美術館蔵
©Musée d'Art Moderne/ Roger-Viollet

展覧会のみどころ

1 絶頂期の作品が多数出品される、パスキンの本格的な回顧展

日本では16年ぶりとなる回顧展の開催。

初期の素描画家時代や、アメリカ滞在時の作品も出品され、絶頂期である柔らかく淡い色彩が特徴の「真珠母色の時代」に至るまでの画風の変遷がご覧いただけます。

2 日本初公開作品を含む、充実した出品作品

ポンピドゥー・センターやパリ市立近代美術館、グルノーブル美術館などヨーロッパ各地から出品される選りすぐりの名品に加え、パスキンの遺作を受け継いだ個人所蔵家から日本初公開作品を含んだ貴重かつ珍しい作品が数多く出品され、120点余りの作品と挿絵本や直筆書簡を展示。

3 コミテ・パスキン*による全面的な協力

本展はコミテ・パスキン会長のトム・クログ氏(パスキンの遺作相続人で愛人リュシーの遺族)の協力のもと、同副会長である美術史家ローズマリー・ナポリターノ氏を監修者に迎え、展示作品の選定や出品に全面的なバックアップを得ました。また展覧会で公開される、パスキンのパスポート等の33点の資料群がアーカイブ・コミテ・パスキンから出品されます。

*コミテ・パスキンはパリに拠点を置き、展覧会活動等を国際的にサポートし、パスキンの作品を広く普及させるための活動を行っています。

最も成功したエコール・ド・パリの画家のひとり、パスキンは、1885年にブルガリアの裕福な家に生まれました。彼は17歳の時に実家を出て以来ほとんど故郷には戻らず、国籍をアメリカで取得したさすらいの芸術家です。パスキンの人生は旅と共にあったといわれ、ウィーンやミュンヘンを経て、パリ、アメリカなど各地を巡りながら芸術家仲間やビジネスパートナーと交流し、優れた作品を残しました。

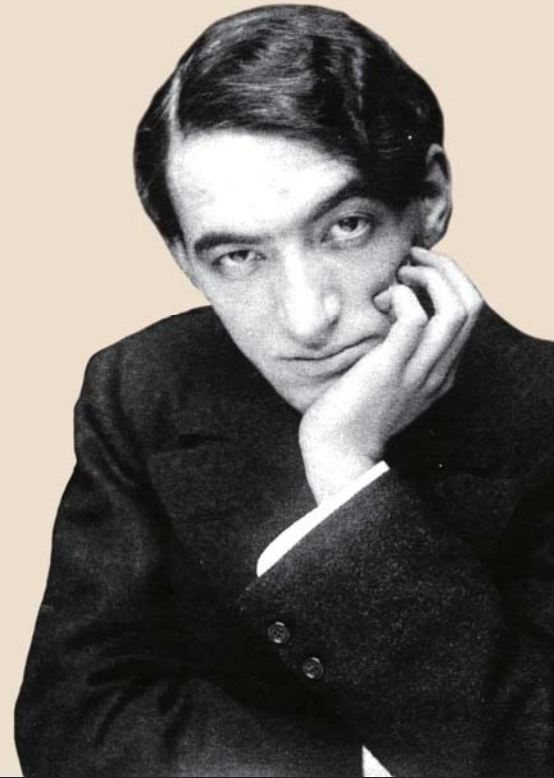
駆け出しの頃から、卓越した描写力を認められ、10代で素描家としての頭角を現します。その後、画家を目指して渡ったパリでは雑誌寄稿による豊かな収入もあり、仲間のリーダー的立場にしながら油彩を独学で学びました。第一次大戦を避けて辿り着いたアメリカでは、抽象絵画的な制作や、キュビズム研究を深めるも、最終的には具象表現に戻ります。そして再び渡ったパリにおいて、作品制作は円熟の域に達します。1927年以降は、虹色の輝きと真珠のような光沢を持った独特の色彩の女性像によって画壇での人気と評価が頂点に達します。

ところで、この絶頂期のパスキンの隣にはふたりの女性がいました。妻エルミーヌと、大戦後のパリで再会し、瞬く間に激しい恋に落ちた愛人のリュシーです。パスキンはこのふたりをモデルに作品を多数描いており、本展にも出品されます。その画家の最期は衝撃的です。リュシーとの結ばれない愛、心身の病気、画廊との確執などに苦しみ、アトリエで壮絶な自死を遂げたのです。旅のような人生の幕を自ら下ろした画家の葬儀の日には1,000人を超える人が葬列をなし、パリ中の画廊は弔意から店を閉じたといわれます。

ジュール・パスキン

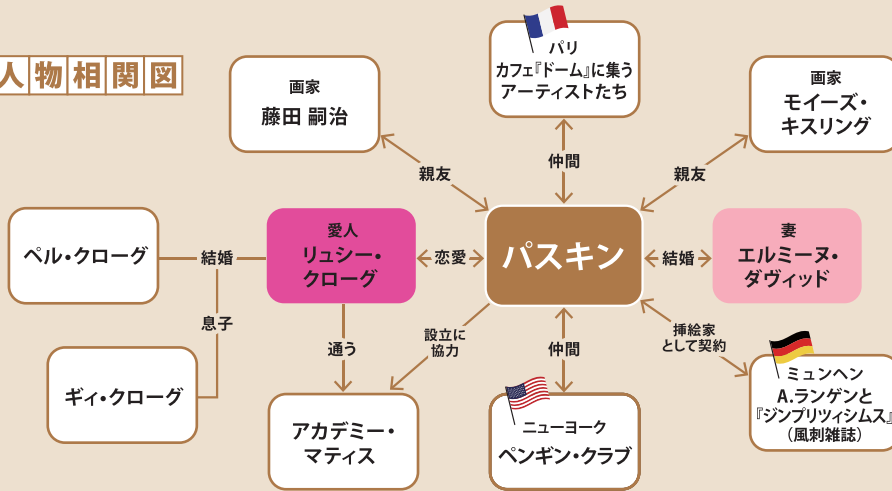
1885-1930

Pascin



1906年のパスキン、パリにて
©Comité Pascin

人物相関図



パスキン略年譜 1885-1930

- | | |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1885 3月31日、ブルガリアのヴィディンにてパスキン誕生。
(本名はジュリウス・モディカイ・ピンカス)</p> <p>1896 ウィーンで中等教育を受ける。</p> <p>1902 ウィーンとブダペストに滞在し、美術の勉強を開始。</p> <p>1903 ミュンヘンに渡り、モーリッツ・ハイマン美術学校へ通う。</p> <p>1904 アルベルト・ランゲン主宰の風刺雑誌『ジンプリツィシムス』へ寄稿。</p> <p>1905 父の要求で、作品のサインを本名ではなくパスキンとする。
12月24日、パリに到着し、芸術家の一団が熱烈に迎え入れる。</p> <p>1906 アンリ・ビングのアトリエで、後に伴侶となるエルミーヌ・ダヴィッドと出会う。</p> <p>1907 ベルリンのパウル・カッシーラ画廊にて初の個展を開催。</p> <p>1910 ハイネの詩集に挿絵を描く。
ベルト・ヴェイユ画廊にて個展を開催。
アカデミー・マティスでモデルをしていたリュシーと出会う。</p> <p>1911 ベルリン分離派展に出品。</p> <p>1913 ニューヨークの「アーモリー・ショー」に出品。</p> <p>1914 10月3日、アメリカに発つ。1915年にエルミーヌ・ダヴィッドも合流。
ウォルト・クーンの主宰する「ペンギン・クラブ」を頻繁に訪問。</p> | <p>1915 ニューヨークで最初の個展を開催。</p> <p>1918 9月25日、ニューヨークにてエルミーヌ・ダヴィッドと結婚。</p> <p>1920 モーリス・スターンとアルフレッド・ステイーグリッツのふたりが保証人となりアメリカ国籍を取得。
10月末、パリに戻る。
リュシーに再会し、急激に愛が芽生える。</p> <p>1922 バーンズ博士がポール・ギョームを介してパスキンの作品を購入。</p> <p>1924 アンドレ・ワルノーと出会う。</p> <p>1927 8月、国籍維持のためアメリカに戻る。
ブルックリン美術館でのパリ在住のアメリカ人画家によるグループ展に参加。</p> <p>1929 ベルネーム=ジュヌ画廊と契約を締結。芸術家としての自由を失ったと感じる。</p> <p>1930 6月2日、アトリエで自殺。
ジョルジュ・プティ画廊にて遺作展開催。</p> |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

ミュンヘンからパリへ

第1部

1903-1905

1903年から1905年までのミュンヘンで過ごした2年間は、ウィーンでの基礎的な美術教育を終えた駆け出しの画家であったパスキンの活動を追うための短くも重要な時期である。彼は鋭い視点と観察力、そして卓越した素描力を認められ、ミュンヘンで発行されていた人気風刺雑誌『ジンプリツィシムス』にプロとして挿絵を描き、早熟な成功者としての道を歩き始めた。その一方で解剖学的な人体表現を重視した美術学校へ改めて通うなどさらに技能を磨くための努力を怠らなかった。この時期、ドイツ表現主義の活動にも接して大きく影響を受けている。しかし、雑誌に素描を提供するだけでは満足できなかったパスキンは、絵画を描く画家となるためにパリを目指すこととなる。



ミュンヘンからパリに移った頃のパスキン(右端)



ミュンヘンの少女 広報用貸出画像③

1903年 鉛筆、紙 パリ市立近代美術館蔵
©Eric Emo / Musée d'Art Moderne/ Roger-Viollet



女の肖像

1903年 木炭、サンギエヌ、紙 個人蔵



室内

1903年 鉛筆、木炭、紙 個人蔵、パリ

パスキンは1902年から1905年まで、ブダペスト、ウィーン、ミュンヘンで美術教育を受けた。本作品はミュンヘンに移り、シュヴァーピングの画学生街に住みながら私立美術学校のモーリッツ・ハイマンに通っていた時期のものである。またこの頃、パスキンは風刺雑誌『ジンプリツィシムス』へ寄稿し、専属契約を結んでいる。10代の頃から、アカデミックな描写とユーモアあふれる独自の描写をすでに使い分けており、素描家としての才能の一端をうかがうことができる。

『ジンプリツィシムス』とは

1896年にミュンヘンで創刊された週刊誌。パリとミュンヘンに拠点を持つ出版人のアルベルト・ランゲンによって発行された。極めて特異な風刺とユーモアがあふれる記事と挿絵が特徴で人気を博した。痛烈な批判精神に貫かれた雑誌である。最年少の挿絵画家として採用されたパスキンは専属契約を結び10代の若者としては十分すぎる月400マルクの報酬を得ていた。パウル・クレーは1906年の日記で、自身もこの雑誌に寄稿するべく応募したが採用されなかったと記している。

『ジンプリツィシムス』1910年1号 表紙イラストはトーマス・テオドル・ハイネ



パリ、第2部 モンパルナスと モンマルトル

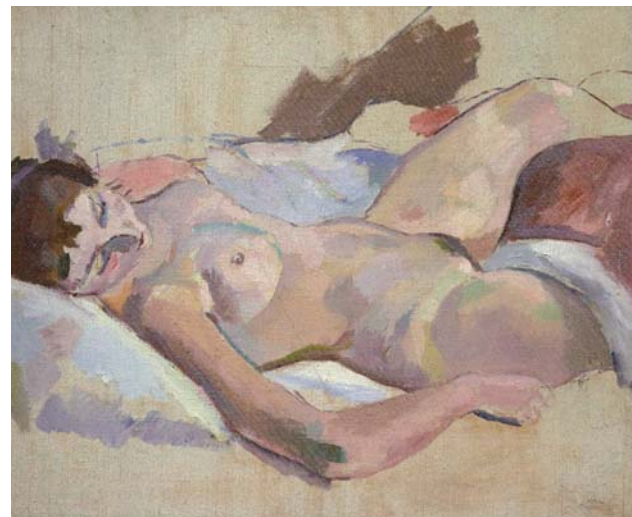
1905-1914

1905年にパリに移住したバスキンはモンパルナスに身を落ち着け、ミュンヘン時代の仲間が集うカフェ「ドーム」に出入りしながら、一方で私学の絵画アカデミーへ入門したり、友人のアトリエを訪問して、油彩の研鑽を積んでいる。素描では、ミュンヘン時代よりも優美で柔らかな穏やかさを持った線へと変化し、パリでの暮らしからの影響が作品に現れるようになる。この時期、ドイツ表現主義とともにフォーヴィスムとも出会い、影響を受けることとなる。

エルミーヌ・ダヴィッドの肖像 広報用貸出画像④

1908年 油彩、カンヴァス グルノーブル美術館蔵 ©Musée Grenoble

バスキンは1906年に、友人アンリ・ピングのアトリエで後に妻となるエルミーヌと出会った。当時のエルミーヌは、数年前に女流画家彫刻家展に出品し、すでに画壇にデビューしていた。また、エコール・デ・ボザールに通いながらアカデミー・ジュリアンで象牙による細密画を学ぶ画学生だった。本格的に油彩画を制作し始めた頃の本作品は、表現にややぎこちなさを残している。ほぼ独学だったという油彩画の発表は、実際には1920年代まで行われなかった。



モデル

1912年 油彩、カンヴァス グルノーブル美術館蔵
©Musée Grenoble

二人の少女 広報用貸出画像⑤

1907年 水彩、紙 ポンピドゥー・センター蔵
©Centre Pompidou, MNAM-CCI, Dist. RMN-Grand Palais /
Bertrand Prévost / distributed by AMF

『ジブリティシムス』寄稿時代の風刺的な画風の一枚である。ふたりの女性像はバスキンが好んだモチーフのひとつで、1905年頃から登場し、画歴全体を通して頻繁に扱っている。本作品では、太った少女と痩せた少女の対比を、細やかなインクの描線と淡彩によってユーモラスに描いている。バスキンの作品に見られる自由かつ対象を的確に捉えた線は、沢山の素描の積み重ねに基づいている。また、初期のインクによる作品は、鉛筆でおおまかに下描きした後仕上げているものが多い。

アメリカ 第3部

1914/15-1920

1914年10月、戦火のヨーロッパを逃れニューヨークに到着したパスキンは、すでにアメリカで名前を知られた画家となっていた。到着の前年に出品した国際現代美術展のアーモリー・ショーで高く評価されていたのである。ニューヨークではペンギン・クラブというグループの仲間となり、アメリカの前衛芸術家達をアカデミズム絵画から開放するような役割を担う。アメリカ滞在時、冬のニューヨークの寒さに耐えかねたパスキンは、後に妻となるエルミースを伴い、アメリカ南部やキューバなどに滞在して暖かい気候や植物などの自然、そして現地での人々の暮らしぶりに魅了され地域色豊かな作品を制作した。



キューバでの集い 広報用貸出画像©

1915/17年 油彩、カンヴァス(両面作品) 個人蔵

屋外のカフェテラスだろうか、飲み物を手にテーブルの周りに人々が集まり談笑している。緑を主とした鮮やかな色彩によって画面からはフレッシュな生命感が伝わってくるようだ。1914年から1920年のアメリカ滞在時代、厳寒の冬のニューヨークに耐えかねたパスキンは、冬期はキューバやアメリカ南部で過ごしていた。キューバで制作された作品には、パリ時代の油彩には見られない、地域の風土が感じられる暖かく鮮明な色彩が特徴的に現れる。



美しいクレオール女性

1916年 水彩、紙 個人蔵、パリ

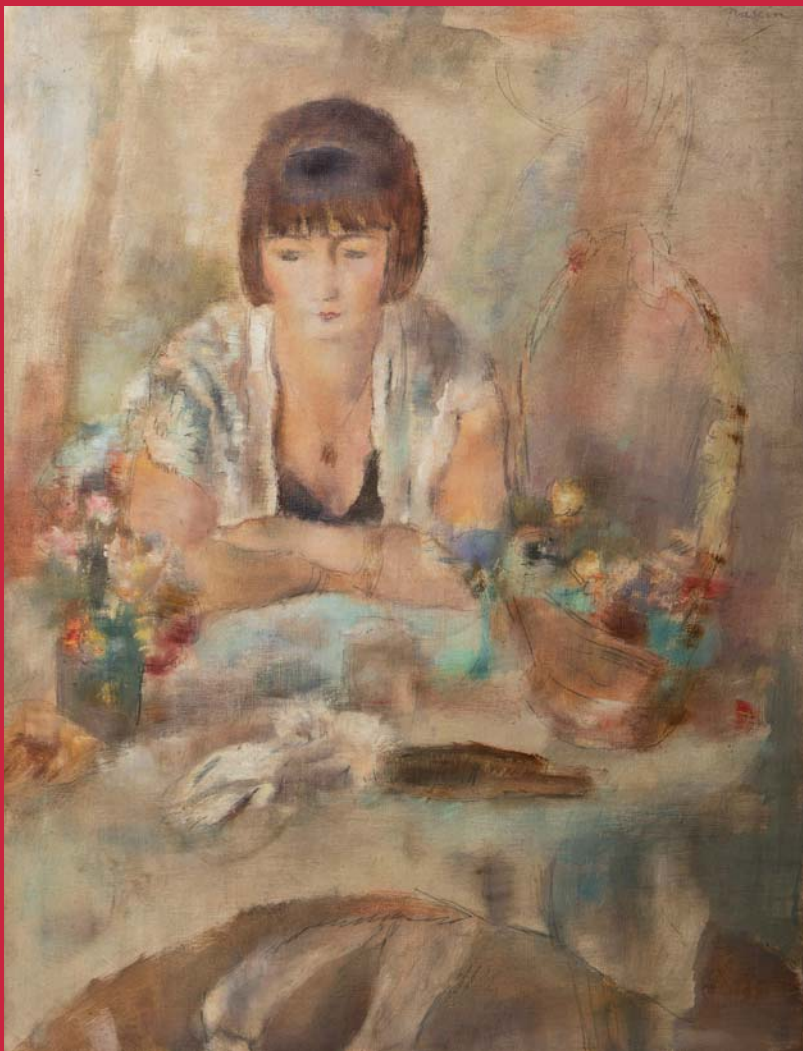
冷たく暗い色彩から解き放たれ、生き生きとして鮮やかな彩りとみずみずしさに満ちた水彩画。滞在了キューバで描かれた本作品では、貧しいながら温暖な気候の中で暮らす現地の混血の女性たちが、持ち前の素早い素描とパスキンらしいバランスのとれた色彩で風景になじむように描かれている。

狂騒 第4部 の時代

1920-1930

第一次大戦が終結した後、パスキンは1920年10月にパリに戻り、パリジャンとしての生活を取り戻した。モンマルトルにアトリエを構え、6年間途絶えていたパリの仲間との交友を再開させる。作品制作においては、アメリカでの有意義な経験によって芸術は円熟の域に到達し、表現の集大成へと向かってゆく。1927年頃からは批評家たちから「真珠母色の時代」と称されるようになり、独特の虹色に輝く色彩、震えるような描線が特徴の油彩画を描き、名声は頂点に達する。その反面で、パスキンは愛人リュシーとの不毛の愛や、画廊との契約の問題、放蕩な生活などで心身を疲弊させてゆく。モンマルトルの喧騒から離れた郊外のアトリエでも制作していた晩年の作品には、線描と色彩が調和しほとんど溶け合うようになる。





テーブルのリュシーの肖像 広報用貸出画像⑧

1928年 油彩、カンヴァス 個人蔵

食卓に肘をつき物憂げな眼差しのパスキンの恋人リュシー。ふたりが出会ったのは、リュシーがアカデミー・マティスでモデルをしていた頃の1910年のことであった。その後、パスキンはエルミーヌ・ダヴィッドと結婚し、リュシーも画家のペル・クローグの伴侶となる。しかし初めての邂逅から10年後の1920年に再会したふたりは惹かれ合い、恋に落ちた。愛する人への慈しみを滲えながら、柔らかな筆触が画面を包み込み、薔薇色、黄、青が仄かな彩りを添える。リュシーを描いた肖像の中でも白眉として知られる名品である。



ダンス 広報用貸出画像⑩

1925年 ミクストメディア、布 アクティス・ギャラリー蔵、ロンドン

のびやかで生命力を感じさせる女性たちが手を取り踊る様子は、素描的な即興性のある筆致で描かれており、同時期の油彩よりも軽やかである。支持体は布で、周囲が扇のように切り取られている。空間の装飾に使われたのだろうか。マティスの《ダンス》を想起させる配色だが、繊細な描線からはパスキンの持ち味である洒脱で抜きん出た描写力が発揮されている。



幼い女優 広報用貸出画像⑨

1927年 油彩、カンヴァス 個人蔵、パリ

長い髪のエリアーヌ 広報用貸出画像⑦

1927-29年 油彩、カンヴァス ポンピドゥー・センター蔵
©Centre Pompidou, MNAM-CCI, Dist. RMN-Grand Palais / Bertrand Prévost / distributed by AMF

豊かな肉体と長い髪を持つエリアーヌはパスキン晩年の作品に時折登場するモデル。独特のかすかな輪郭線や全体に霧のように漂う倦怠の雰囲気、そしてモデルの肌からあふれ出すかのようなフェミニティーなど、最晩年にパスキンが到達した芸術の集大成が示されている。パスキン作品には珍しく複数年かけて仕上げられた作品で、1927年8月から10ヶ月間のアメリカ滞在をはさんで制作された。1929年には色彩も形も曖昧で溶け合うような表現が進んでおり、制作開始時からさらに成熟した技法で仕上げられている。



ミレイユ 広報用貸出画像⑪

1930年 パステル、厚紙 ポンピドゥー・センター蔵
©Centre Pompidou, MNAM-CCI, Dist. RMN-Grand Palais / Philippe Migéat / distributed by AMF

ポーズの合間にソファでうたた寝をしているモデルを、素早く描きとめたのだろうか。ミレイユは、晩年のパスキンが何度も描いたモデルのひとりである。淡く柔らかい大気の中に、今にも溶け込みそうなモデルを浮かび上がらせる繊細な線描には、若い頃から評価されていた素描家としての実力が発揮されている。作品を包み込む暖かい陽光からは、同時にモデルを見つめる画家の優しいまなざしを感じる。全体の微妙な色調に対し、肌と下着の輝く白色と羽織った上着の褐色が、絶妙な対比効果を生んでいる。